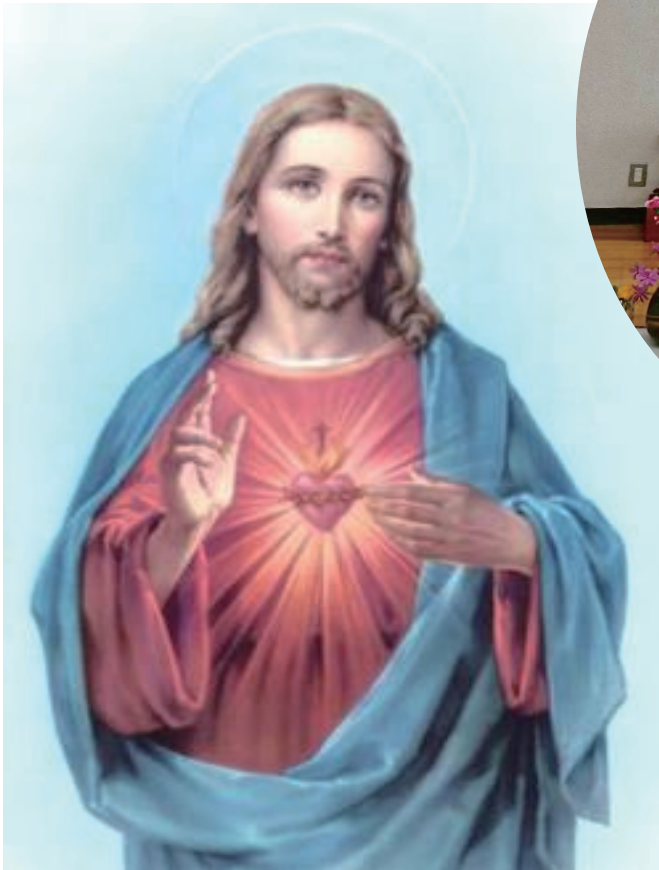




Catholic Mizushima Church 2021 カトリック水島教会 ニュース 6月号

キリストにおける兄弟姉妹の皆様、
6月は「主イエスのみ心の月」です。ご聖体を賛美し、イエス様のみ心を礼拝し、感謝する時です。十字架上でイエス様の脇腹から流れ出た「水と血」によって教会に7つの秘跡を残してくださいました。ご存知の通り、家庭において「母の日」を祝う5月は、教会では聖母マリアの月です。聖母月を終え、続いて「父の日」を祝う6月、「主イエスのみ心の月」に入りました。人類をご自分の両腕の中に包み込み、贖って下さる主・イエスキリストのみ心に日々を委ね過ごして参りましょう。

ロイ神父



今月の祈り

〔福音宣教の意向〕

キリスト者の共同体に支えられて結婚の準備をすすめている若者たちのために祈りましょう。寛大さ、誠実さ、そして忍耐をもって、愛を育むことができますように。

〔水島教会の意向〕

私たちは聖霊の導きに従い、償いの心を持ってご聖体を受け、イエス様と共に祈り合い、働き合い、全ての人の内におられる神様を認め合いましょう。

「長居公園仲間の会」の活動紹介

水島教会と長い関りのある、中桐康介さんの「オシテルヤン日記」から、彼の活動の一端をご紹介します。読まれて関心を持たれた方は「大阪・長居コミュニティスペース オシテルヤ」か「オシテリヤン日記」で検索してみてください。

ゴミ屋敷の片づけを手伝って見えてきたことー必要なのは環境と気持ちを整える支援

「ゴミ屋敷」がテレビでしばしば話題に上がります。オシテルヤでもゴミ屋敷に携わることもよくあり、気になっていることがあります。ゴミ屋敷の主の中には障害や疾病を持つ人がおり、本来なら享受できるはずの福祉的な支援を受けることができずに、結果としてゴミ屋敷になってしまっている場合があるのではないかとことです。ぼくが携わった人の例でも、福祉的な援護の必要性があるにもかかわらず、さまざまな理由で支援を受けることができずに追いつめられている人がいました。ゴミに埋もれながら栄養失調のために働けなくなり、死に瀕したところを救急搬送された人。管理会社から強制的に立ち退かされ、ホームレス状態になった人。ゴミに囲まれて精神的にまいってしまい、自らゴミに火をつけて、放火の罪で逮捕、収監されている人…。ゴミ屋敷の原因に手当することなく、片付けだけをして、同じようにまたゴミ屋敷になる可能性も高いでしょう。また、ゴミ屋敷をひとつのサインととらえて、支援の糸口としていくという視点も必要です。住吉区在住の森川さん（58）もそんな一人です。相談を受けてマンションを訪れたところ、部屋に近づくとすでに何とも言えない異臭がただよっています。ドアを開けると天井に届くまで積み上げられたゴミの山。いやむしろゴミでできた洞窟のような趣です。パンや卵などの食品が通常では考えられないほど大量にストックされています。雑誌や広告チラシなどの紙類も大量に山積みされています。室内には異臭が充満していますが本人は意に介する様子はありません。隣と上下の部屋は異臭とゴキブリのために出て行ったそうです。森川さんもマンションの管理会社から一か月後の立ち退きを求められ、引っ越すことになりました。立ち退くにあたって、荷物を残していたら高額の処分費用を請求されるので、片づけを手伝ってもらえないか、というのが相談の内容です。玄関の扉を開けたら、下手に触ると天井近くまで積みあがった荷物が崩れ落ちてきます。

森川さんには軽度の知的障害がありますが、ヘルパーや相談員の支援は受けていません。彼女の「問題」の一つは大量に物を収集してしまうこと。醤油のビンが20本ほど、トイレトペーパーは100ロールほど。もう一つの「問題」は捨てられないこと。消費期限が過ぎた食品も、空のペットボトルも、ゴキブリの巣となったカバンも捨てられません。

ゴミを処分するだけなら話は簡単ですが、ぼくらにはゴミにしか見えないものも森川さんにとっては大事なもの。ひとつひとつ確認するので、何倍も時間と手間がかか

ります。そうしないとパニックを起こして、「なんでそれ勝手にすてるの！」と怒鳴りだすこともしばしば。そんな森川さんと付き合いながら、退去期限までに少しずつ片付けていきます。岸壁に洞窟を掘るように、捨てられるものは捨て、引っ越し先に運ぶものは段ボール箱に詰めて、順次運んでいきます。ものを動かすたびに、大群のゴキブリが飛び出してきます。最終的に2トンほどのゴミを処分し、2トンほどを引っ越し先に運びました。

障害者福祉のノウハウを活用し「片付けかた」を教える

いっしょに作業をしていると、森川さんの障害による特性が見えてきました。こだわりが強くてなかなか捨てられないのですが、逆に「これはいらない」と確認をすれば捨てられるということ。それから注意が散りやすいという特性。作業中もあちこち気が移ってしまって、元の作業を忘れてしまいます。「今は紙を仕分けしましょう」と声かけして注意を促せば、再び集中することができます。そして一日の作業の終わりに「今日はここまで進めた」「ゴミをこれだけ出せた」と振り返りをして達成感を高めていきます。

コミュニケーションをとって信頼関係を作りながら「今後は追い出されることのないよう、掃除や片づけをしましょう」と働きかけることもします。先が見えてくると森川さんも自信を得たのか、明るい表情が増えてきました。森川さんは「ゴミをため込む迷惑な人」ではなくて「片付けの仕方がわからなくて困っている人」だったのです。一人で片付けることは難しくても、誰かが手伝うことでできるようになるのです。

このように、オシテルヤでは障害者福祉のノウハウを活用して、自ら片付け作業をしやすいように環境と気持ちを整える支援をし、さらに引っ越しが終わった後には、日常的なサポートを受けられるように制度への結び付けの支援を行っています。地域社会の中で排除をこうむるおそれを減らし、より快適に暮らす権利を保障することにつながればと願っています。制度のはざまに陥りがちな人へのケアに、福祉的な視点を持ちながら地域課題に取り組む事業を、制度的にも市民の共同レベルでも育てていく必要を感じます。

もう一つ気になることは、片付け支援によってゴミ屋敷を解決したとしても「迷惑な人は追い出せばいい」と考える人々の側の問題は、何も解決していないということです。逸脱しがちな人を排除して事足りりとする人々を放置することは、選別・排除のサイクルを再生産することに他なりません。異質なものを、周辺に追いやられたものにこそ注目し、不寛容に陥りがちな市民社会に風穴を開ける取り組みこそ、本当は重要だと思います。

(People's News No.1746「オシテルヤン日記」より)

